

第3章 坂田の商工業の変遷

——近代商業センターをめざして

坂田商工業の草分「明石醤油」

君津市坂田——わずか十数年前まで半農半漁のどかな農漁村にすぎなかった坂田は、新日本製鉄の進出により、商工業の町へと大きく変貌を遂げつつある。君津駅坂田口を降りると、かつて美り豊かだった水田は一面埋め立てられ、整然と区画された道路と商業地区に生まれ代わっている。駅前広場の右手には、千葉相互銀行と千葉銀行が並んで立っている。その反対側、左手に目を転じると「坂田商店街」のアーケードをはさんで、商店街が立ち並び、その中心に、地上四階建のイトーヨーカ堂がひとときわ高くそびえている。また、駅前広場の正面には、地上五階建のホテル千成があり、その前をほぼ東西に走る上下各二車線の道路をはさんで各種商店が軒を並べてつらなっている。

いま、商工業の町として大きく変身しようとしている坂田も、明治の初期には、まだ農業だけに依存する純粹の農村にすぎなかった。部落の中に商店はなく、買い物といえ



君津市商業センターとして発展する君津駅坂田口

ば、木更津まで出かけるか、部落を訪れる行商人を通じて買い入れるかであった。

ただ、坂田に他と違っていたところがあったとすれば、「明石醤油」があったことである。「明石醤油」は文政九年（一八二六年）、坂井四郎兵衛が創業したもので、その後次第に事業を拡張し、江戸時代末期には諸味元石（醤油の原料である大豆、小麦の総石数）が年間一〇〇石に達し、この地方でも有数の醤油醸造業者となっていた。

徳川家康が江戸に入り、徳川幕府を開いたころ、醤油は大阪から船ではるばる運ばれていた。その後、江戸の人口がふえ、消費量が增大するにつれ、関東地方でも醤油醸造を試みる者があらわれ、原料の収集や江戸への運搬の便利な銚子や野田の醤油醸造業者が成長した。それとともに、醤油は一般農民の間にも広まり、各地に醤油醸造業者が輩出した。ここ君津郡下でも醤油醸造業はなかなか盛んで、明治初期には業者数は四八軒にのぼっていた。それらの多くは、醸造量も少なく、近隣農民の消費用に醸造を行なっている程度であったが、坂田の「明石醤油」と青堀の「カギサ醤油」は抜きん出た存在で、近隣のみならず、木更津、東京方面へも広く出荷していた。

明治時代に入って、江戸は東京と名を変え、政治、経済、文化の中心として大きく成長を遂げていった。また、横浜も、外国貿易の窓口として大きく成長した。東京湾をはさんで一衣帯水の東京、横浜の発展につれて、醤油の需要は急増し、「明石醤油」をはじめ、君津郡下の醤油醸造業者は、その醸造量を年々増大させていった。なかでも「明石醤油」はその品質のよきことが広く認められ、市場を拡大し、大正年間には諸味元石二〇〇〇石にまで成長した。

「明石醤油」の強みは、品質のよきであった。明治時代中ごろから、政府は殖産振興の



坂田大通り(昭和55年12月)

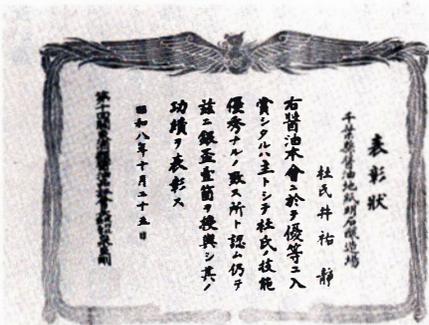
一環として各地で醸造品の品評会や博覧会を開催し、優秀製品、優秀業者を表彰したが、「明石醤油」でも積極的に出品し、数々の表彰に輝いた。

たとえば、大正八年の第七回全国酒類醤油品評会では、醤油の部において優勝の栄誉を勝ちとった。また、関東酒類醤油品評会においては、第六回（大正十二年）、第七回（昭和二年）と連続優勝し、昭和九年の第九回でも三度目の優勝に輝いた。この間、昭和三年の大札記念京都博覧会においても、みごと銀牌の栄誉に輝いている。こうした栄誉は当然のことながら「明石醤油」の声価を高め、生産、販売の増大につながったのである。

明石醤油の成長、発展は、坂田の人々にさまざまな就労機会を生み出した。材料の仕込み、出荷などには大量の人数を要し、坂田の人々が手間賃稼ぎで多数従事した。そして、生産量の増大とともに、それらの人々の中から常備になる者も多数あらわれた。大正時代から昭和初期、「明石醤油」の最盛期には、五〇名余りが雇用されていたというから、坂田にとって、その存在は大きなものがあつた。

とりわけ、出荷には大量の人手を要し、多くの人が従事した。明治初期、「明石醤油」の製品は、字本名輪の浜辺から直接船積みされ、東京、神奈川方面に出荷された。このため、本名輪には船積み倉庫が設けられ、大和田村の榎本金次郎がその輸送を一手に引き受けていた。

明治の末から大正の初めにかけて、木更津あるいは富津への道路が整備されるにつれ、輸送方法も変化した。すなわち、坂田から直接船積みするのではなく、大八車や荷馬車で木更津あるいは富津へ運び、そこから出荷するようになったのである。その後、大正四年、内房線が開通するに及び、千葉方面あるいは遠方小口扱いといつて、鉄道輸送も



数々の栄誉に輝く「明石醤油」

併用されるようになった。

しかし、木更津、富津への大口輸送、あるいは地元小売店への小回りの配送には、大八車と荷馬車が主に使われ、多くの村人が従事した。年頭の「初荷」のときなどは、念入りに手入れされた馬が化粧飾をつけて馬車をひき、馬方は印絆天を着用し、いで立ちもりりしく濶歩する。その姿はひとつの「風物詩」ともいえるものであった。

しかし、太平洋戦争は、この「明石醬油」にも大きな打撃を与えることになった。食糧統制のおおりで醬油の原料である小麦、大豆、塩の購入が極端に圧迫されてしまったのである。そして、戦後は、大量生産、大量販売の大手業者が市場を席巻し、中小業者の淘汰がすすんだ。君津郡下でも、戦時中の統制下で廃業する業者が続出し、終戦時には三〇軒となっていたが、その後も廃業するものがあとをたたく、現在では「明石醬油」を筆頭にわずか九軒しか残っていない。しかし、「明石醬油」では、製造方法の近代化につとめるとともに、品質向上の努力を続け、昭和四十八年には食糧庁長官賞を受賞するなど、着実な歩みを重ねている。また、最近では、「そばつゆ」や「漬物」などの製造販売にも乗り出し、その味の良さは市場で好評を得ている。

酒類販売を兼ねた小売店

明治から大正にかけて、「明石醬油」が隆盛を迎えるとともに、海苔養殖が第一次黄金時代を迎えるなかで、ここ坂田にもいくつかの商店が誕生し、さまざまな商品を扱い始めている。

■初荷の祝い酒

正月二日、そろいの印絆天に身を固めた馬方たちは、明石醬油に勢ぞろいし、祝い酒を交したあと、ノボリを立てた馬車をひいて、それぞれの目的地へ出立する。ところが、お得意先を回っているうちに、行く先々で「初荷」到着のご馳走と祝い酒。酒好きの馬方は、すすめられるままに盃を重ねるうちに、ついつい飲みすぎでしまう。あげくの果ては、馬車に乗せられて、馬に曳かれて工場にたどりつくというありさま。これも往時の坂田の楽しい話題のひとつであった。

明治の初期に創業した商店では、「喜三郎」、「四郎左エ門」、「田代屋」、「した店（平野商店）」がある。

「喜三郎」は、食用油の製造業で、創業者は廣部喜三郎であった。この地方では、江戸時代より菜種の栽培が盛んで、坂田でも広く作付されており、農家から菜種を預り、搾油して納めるとともに、一部、一般市販を行なった。

「四郎左エ門」の創業者は井祐平蔵で、現在の井祐典夫家である。明石醬油の傭人をお客にもち、酒類の販売を中心に、雑貨品も扱った。

「田代屋」の創業者は安藤忠七で、現在の安藤武男家である。豆腐、酒類販売と日用雑貨品を扱っていた。

「した店」の創業者は平野卯之吉。現在の平野治二家である。主として、子供用の日用雑貨品を扱い、ハガキ、印紙なども販売していた。

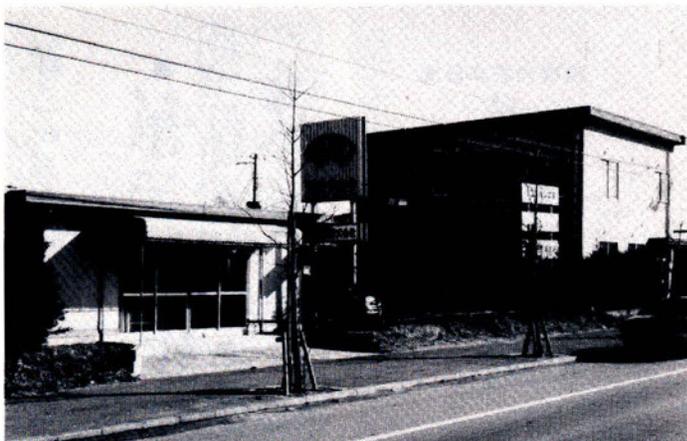
明治九年には「吉兵衛」が開店した。平野吉兵衛が煙草販売を始めたのがおこりで、マッチなど日用雑貨品も扱った。現在の平野秋蔵家である。

明治十四年には、海岸のそばに「重兵衛」が開店した。創業者は小幡定吉で、酒類を扱い、漁師たちの溜り場となっていた。現在の小幡良一家である。

その後、明治二十八年には、安藤せんが「あめ屋」を開店した。主として、子供たちを相手に雑貨、駄菓子類を扱い、「した店」とともに子供たちの人気の的であった。

続いて、大正時代になると、「紋七」「安さん」などが開店した。

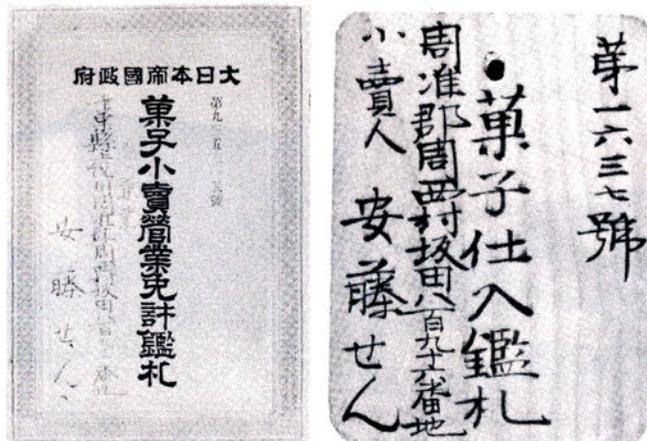
「紋七」は、大正三年に平野久三郎が開いたもので、酒、煙草のほか、雑貨類を扱った。現在の平野豊作家である。



明石醬油事務所と小売店(左)

■戦前の坂田の商工業者

商号	業種	創業	氏名
四郎左エ門	酒	明治初期	井祐平蔵
安さん	酒・雑貨	大正中期	荻込安太郎
田代屋	酒・雑貨・豆腐	明治初期	安藤忠七
吉兵衛	雑貨・煙草	明治九年	平野吉兵衛
重兵衛	酒・煙草・雑貨	明治一四年	小幡定吉
紋七	酒・煙草	大正三年	平野久三郎
あめ家	雑貨	明治二八年	安藤せん
した店	雑貨	明治初期	平野卯之吉
(平野商店)	雑貨	明治初期	広部 春吉
(有)広部海苔店	海苔問屋	昭和一三年	保坂 勝
(有)保坂海苔店	海苔問屋	昭和一四年	坂井四郎兵衛
明石醤油(株)	醤油醸造	文政九年	小幡浅吉
小幡造船所	造船業	明治初期	
(重兵衛船大工)			
初津建築	家大工	明治二〇年	初津万蔵
(初津人工)			
花の井建築	家大工	明治二二年	斉藤良蔵
喜三郎	食用油製造	明治初期	広部喜三郎
車屋(全兵衛)	馬車大車製造	大正六年	坂井豊之助
樽屋	醤油樽製造	大正一三年	関口清次郎
善兵衛	豆腐製造業	明治中期	牧野藤太郎
与左エ門	呉服商	大正初期	平野仁三郎



「あめ屋」の菓子仕入鑑札と営業免許鑑札

一方、「安さん」は、大正中期、荻込安蔵が国道一六号沿いに開店、酒類を中心に雑貨類を広く扱った。当時は海苔養殖も隆盛期にあり、海から上がった漁師たちがここに集まり、酒を片手に暖をとりながら、談論に花を咲かせていた。また、街道筋ということもあり、行人人や馬車引きたちが立ち寄っては一ぶくつけるといふことで、「重兵衛」とともに客足が絶えなかった。現在の荻込繁雄家である。

もう一軒、大正時代には「与左エ門」といって呉服を取り扱っている店があった。平野仁三郎が開いた店で、現在の平野與志雄家である。別名「反物屋」とも呼ばれていた。このように、明治から大正にかけて坂田では一〇軒の商店が誕生したが、そのほとんどは酒類および雑貨品の販売店で、規模も小さなものであった。むしろこの時代、商業の中心地となっていたのは貞元村釜神付近で、そこには菓子製造業や時計店、金物店、洋品店、食料雑貨店などが軒を並べ、坂田の住民もちよとした物を買う時には、そこまで足をのびさなければならなかった。

坂田の商店で一風変わっているのは、一〇軒のうち五軒で酒類を扱っていたことである。豆腐販売業の「田代屋」や菓子、雑貨店の「紋七」まで酒を置いていたのだから面白い。しかも、それぞれそれなりに繁盛していたという。これもやはり、「明石醬油」での手間賃稼ぎと海苔養殖で、坂田の人々は潤っていたからと思われる。

その当時、酒屋はほとんどはかり売りで、一合マスを使い、マスの底に受け皿を置いて、酒樽から酒を注いで売っていた。受け皿にあふれた酒を人々は「タレ」といい、そのタレが多いとか少ないとかいい合いながら飲んだのだった。「明石醬油」での一日の労働を終え、あるいは寒風の中での海苔取り作業を終えて飲む一杯の酒、それは坂田の人



海苔漁民や行人人で賑った「安さん」

々にとって何ものにも代えがたい楽しみであったのであろう。

海苔取り舟で栄えた「重兵衛の船大工」

明治十六年以降本格化した坂田の海苔養殖業はその後次第に発展し、明治末には部落民のほとんどが海苔養殖に従事するまでになった。そして、大正時代から昭和初期にかけて第一次黄金時代を迎えるに至った。その中で生まれ、発展したのが「重兵衛の船大工」こと小幡造船所であった。

小幡造船所の創業者は小幡浅吉である。彼は明石屋（現在の「明石屋材木店」）で修業し、造船技術を習得、明治二十五年に独立し、小幡造船所を開いた。しかし、地元では正式名称で呼ぶ者は一人もなく、「重兵衛の船大工」として親しまれていた。

小幡浅吉は職人氣質の仕事師で、仕事のていねいなことで評判であった。このため、坂田漁民の海苔取り舟をほとんど一手に引き受けたほか、木更津、富津などの漁業組合からも注文を受け、五大力船や運搬船などの中型船も多数建造した。その主なものをあげると、次のようなものがある。

「亀や丸」——木更津の漁師からの注文

「八幡丸」——坂田、山七からの注文

「久吉丸」・「興進丸」——畑沢漁業組合からの注文

「坂漁丸」——坂田漁業組合からの注文

「木漁丸」——木更津漁業組合からの注文

船種別価格の推移

年代	船種	底曳船	捲伝馬	海苔取舟	運搬船	船大工手間
大正10年 ～昭和9年		400円	28～30円	約15円	650～700円	1円 ～1円20銭
昭和10年 ～昭和19年		600円	約40円	約25円	約1,000円	1円20銭 ～1円50銭
昭和20年 ～昭和29年		1,200円	約80円	約55円	約2,000円	5円～6円
昭和30年 ～昭和39年		10～12万円	約8,500円	約5,500円	15万 ～20万円	約600円
昭和40年		40万円	約30,000円	約22,000円	約50万円	1,500円 ～2,000円

大正時代から昭和四十年代までの船種別価格の推移、および昭和二十四年の小型船価格は下表のとおりで、「重兵衛の船大工」は坂田漁業の発展に歩調を合わせて成長を遂げてきた。しかし、昭和四十年、坂田漁業協同組合が漁業権を放棄し、坂田地先海岸が埋め立てられるに及び、坂田漁民に親しまれた「重兵衛の船大工」もその幕を閉じた。

小幡造船所のほか、明治時代には、「初津大工」と「花の井」という二軒の家大工が誕生した。「初津大工」は初津万蔵が、「花の井」は齊藤良蔵がそれぞれ創業したもので、地元の家建設に当たっていた。

また、大正六年に坂井豊之助が創業した「車屋」は、馬車や大八車を製造し、しばしば名人芸を見せて坂田の人々の運搬に貢献した。さらに大正十三年には、関口清次郎が「樽屋」を創業し、明石醤油の醤油樽製造を一手に引き受け、盛況であった。しかし、戦後になって、樽がビンに代わったのに伴って、廃業した。

海苔問屋「広部海苔店」「保坂海苔店」

坂田における海苔養殖業は、大正時代中ごろから昭和十年にかけて第一次全盛時代を迎えた。そして、それに伴って、海苔問屋という新しい商人が生まれてきた。

坂田で取れる海苔は、海苔業者によって加工され、乾海苔にされたあと、青堀や畑沢の海苔仲買人買い取られ、消費地へ運ばれていた。しかし、当時、生産地と消費地の価格差は大きく、仲買人たちの得る利益は莫大な額にのぼっていた。こうした旧弊を打ち破り、生産者の利益を守るため、坂田の海苔漁民たちは昭和六年から「共同出荷所」

■昭和二十四年の小型船価格表

(木更津木造船工業協同組合)

一、海苔取舟	一等	五、七〇〇円
	二等	五、二〇〇円
	三等	四、七〇〇円
一、漁船	卷	八、五〇〇円
一、漁船	四尺	上 五〇、〇〇〇円
	下 四五、〇〇〇円	
一、漁船	四尺七、八寸	上 七五、〇〇〇円
	下 七〇、〇〇〇円	
一、漁船	五尺一、二寸	上 八〇、〇〇〇円
	下 七二、〇〇〇円	
一、漁船	五尺四、五寸	上 八八、〇〇〇円
	下 八〇、〇〇〇円	
一、漁船	五尺七、八寸	上 九七、〇〇〇円
	下 八八、〇〇〇円	
一、漁船	六尺	上 一二五、〇〇〇円
	下 九七、〇〇〇円	

を建設し、自分たちの手で東京の市場まで運び、直販体制に切りかえた。

こうした中で、広部春吉は、昭和四年十月、焼玉エンジン付機帆船（二〇トン）を購入し、海苔委託販売運送業を開業。坂田乾海苔生産組合の委託を受けて、組合の生産する海苔を日本橋の海苔問屋連合会傘下の問屋に運び、委託販売業務を開始した。

そして、昭和十二年十月には、産地海苔問屋「広部海苔店」を開業した。その後、長男・勇は昭和十三年、東京・深川の乾海苔問屋「柿沢商店」に入社した。十六年に応召し、二十年九月に復員、海苔店業に従事した。

一方、昭和十四年には、保坂勝が「保坂海苔店」を開業し、産地問屋として坂田の海苔を取り扱い、東京や千葉県下の小売店へと荷をさばっていた。

戦時中は、海苔も統制され、自由な販売は許されなかったが、この二つの海苔商店は、戦後、坂田海苔養殖が第二次全盛期を迎えるに及び、大きな成長を遂げることになる。

戦争の落とし子「八重原航空廠」

太平洋戦争勃発直後の昭和十七年、周西村には一つの大きな事件が訪れた。それは、周西村の久保、台、八重原村の李師、南子安、北子安の五部落にまたがる約一〇〇ヘクタールに及ぶ土地にこつぜんとして「第二海軍航空廠八重原工場」が出現したことであった。

昭和十七年四月、木更津海軍航空廠岩本中將から兵器、発動機工場として八重原村に工場を建設したい旨通達があり、この地帯一帯の美田を否応なく強制買収、その十日後

■坂田のかや葺職人

上記のほか、明治から終戦ごろまで、坂田にはかや葺き職人が多数いた。坂田の丘陵地には良質のかやが生い茂り、「仲町がや」「谷がや」などとして知られていた。坂田の人々は、冬の農閑期を利用してそれらのかやを刈り取り、坂田をはじめ、近在の農家の屋根葺きに従事していた。最盛時には、かや葺き職人は十数名を数えたが、いずれも専業とまではいかず、農、漁業の閑期を利用して副業として営んでいた。

には工場の建設に着手するという、戦局を思わせるあわただしさであった。主として朝鮮人を主体とする徴用工員二五〇名によって、工事は昼夜を分かたず続けられ、早くも一部完成し、操業を開始した。

同工場では機銃などの兵器および航空機用発動機の製造を行っていたが、操業が本格化した昭和十八年から十九年にかけては、県内外から学徒や婦女子が勤労働員に狩り出され、それらの製造に従事した。坂田からも多数の青少年婦女子が動員された。

昭和十九年に入って、米軍機による本土空襲が始まると、八重原航空廠は爆撃の危険を避けるため、近在各地に分散されることになった。坂田では、水越隆彦家(家号「谷」)が工場幹部の宿舍となったのはじめ、安藤喜男家(家号「多賀」)、広部邦夫家(家号「油屋」)、長福寺、坂田漁業組合事務所などに機械および工員が分散された。このため、坂田はそこで働く技術工員たちが多数分駐し、活況を呈するに至った。

しかし、終戦とともに八重原航空廠は操業を停止、坂田に分駐していた兵隊や工員たちもそれぞれ故郷へと引き上げ、坂田は再び静かな農村に戻った。その後、間もなく八重原工場はGHQによって取り壊されることになり、わずか三年ちよつとの短い生命を終えた。そして工場跡地は、食糧増産のために再び元の農地へと逆戻りした。

戦後の坂田の商工業

戦後の混乱期が過ぎ、日本が再び独立を回復した昭和二十七年ごろには、坂田も再び息吹きを回復し、新しい商工業が生まれてくる。

昭和二十年代半ばには坂田の海苔養殖業は第二次黄金時代を迎えつつあり、三十年代半ばにかけて飛躍的な発展を遂げていく。それとともに、アサリやハマグリなどの養貝業も年々盛んとなり、坂田漁業組合は飛ぶ鳥をも落とすほどの全盛時代を迎える。

海苔養殖業の発展に支えられて、昭和二十二年、兵役から帰った広部勇は産地乾海苔問屋「広部海苔店」を再開、「保坂海苔店」とともに坂田を代表する海苔問屋に成長、昭和二十七年には有限会社に改め、「広部商店」と改称した。

また、昭和二十五年には石崎堅次が「京都食堂」を開店した。さらに二十七年には石崎彦義が「京都輪業商会」を開業し、自転車およびオートバイの販売を開始した。その後、三十二年には平野二郎が「三和商事」を設立し、雑貨、酒、煙草の販売業を開業、坂田の商業も一段と多彩となった。

三和商事の創業者、平野二郎は、その背景について次のように語っている。

「その頃の坂田漁業協同組合には、九月ごろになると浦安とか神奈川、遠くは関西地方から海苔移植の契約者がやってきて、毎日がお祭りのようでした。組合事務所ではいつも理事会やら委員会が開かれ、賑やかなものでした。当時の坂田は、他の土地では見られないような消費力をもっていた。」

海から陸へ、農業から商工業へ

昭和三十六年の夏、君津漁業協同組合が漁業権を放棄し、八幡製鉄（現新日本製鉄）の君津進出が決定した。坂田漁業協同組合も揺れに揺れたが、昭和四十年五月には漁業



三和商事

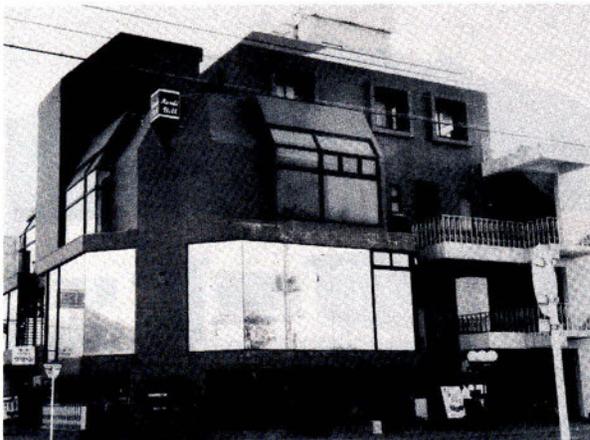
権の放棄を決定、この周辺の海面はまたたく間に埋め立てられ、一大工場地帯が出現した。

新日本製鉄君津製鉄所は昭和四十三年十一月、第一号高炉の火入れ式を行ない操業を開始した。それに伴って、九州、北海道、東北から新日鉄関係者が大量に転入し、坂田に隣接する大和田をはじめ、八重原、上湯江、常代、宮下など町内各地に新日鉄および関連会社の住宅が建設され、君津町の住民は急速にふくれあがっていった。そして、君津町は隣接する小糸町、上総町、清和村、小櫃村を合併、昭和四十六年九月には君津市が誕生した。

この間、海を放棄した坂田の漁民たちは、明日からの生活の糧を求めて、それぞれの特技や持ち味を生かし、商工業者へと転業していった。旧組合員の転業状況は別表のとおりで、坂田は漁業から商工業へと変身し、その内容も多彩なものとなっていった。

一方、新日鉄の進出に伴って新しい町づくりの動きが起こり、君津町（のち君津市）の都市計画基本構想に基づいて、土地区画整理組合が次々と誕生した。坂田でも坂田土地区画整理組合が生まれ、水田を埋め立て、そこに新しい商業中心地を生み出すべく、計画が推進された。かくして、坂田の水田、六〇ヘクタールが埋め立てられ、そこに整然と区画された商業用地および住宅地が姿を現わした。

坂田の住民は、漁業権の放棄に続いて、父祖伝来の田畑を失った。そして、その代わりに、商工業を中心とする新しい町づくりにも挑んだのである。

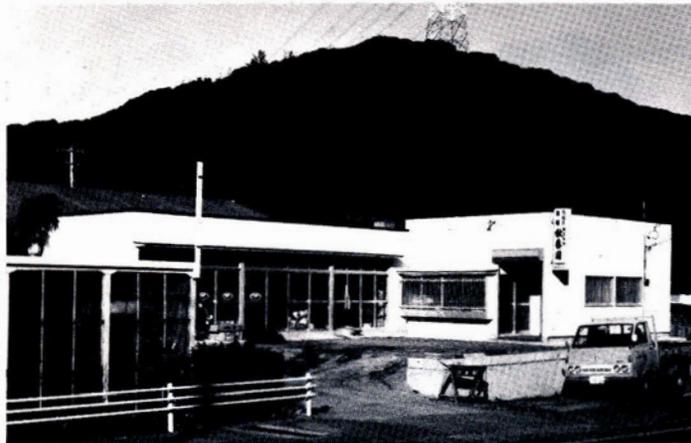


マルキビル

■坂田漁業協同組合の転業者

《小売・サービス・卸業関係》

商 品	業 種	代 表 者
ア ッ プ ル	理 容 業	有野雅二(操)
高 瀬 商 店	日 用 雑 貨	高瀬勝太郎
広 瀬 商 店	L P ガ ス 販 売	広瀬俊雄
坂 田 食 堂	飲 食 業	秋元清
(有)本間鮮魚店	鮮 魚 業	本間宗吉(久雄)
フ シ イ パ ー ル	宝 石 業	伏居正夫
(有)大 香 園 関	飲 食 業	小野孟男
(有)秋 香 園	貸 鉢 造 園 業	秋元晋
(株)富 士 食 品	冷 凍 食 品 卸	秋元聰(秀夫)
か ね 八 模 型 店	玩 具	井祐稔
丸 重 商 店	酒 雑 貨	斉藤保(好夫)
こ ず え	喫 茶	斉藤秀雄
(有)君津フラワーショップ	生 花	栗原秋蔵(俊夫)
(株)サカイ(ホテル千成)	ホ テ ル	坂井君子
上 総 屋	陶 器	広部一郎
ス リ ー フ ァ イ ブ	サ ー ビ ス 業	牧野安雄
長 谷 川 魚 店	鮮 魚	長谷川松雄
(株)サンユースペシャルストア	スチール品文房具	色部隆夫
(有)カネイ商事	家庭金物陶器飲食	色部晋司



秋香園

■NHKに紹介された「秋香園」

秋元晋は、昭和三十九年から観賞植物店「秋香園」を開き、転業成功者として、昭和四十二年春、NHKから放映された。

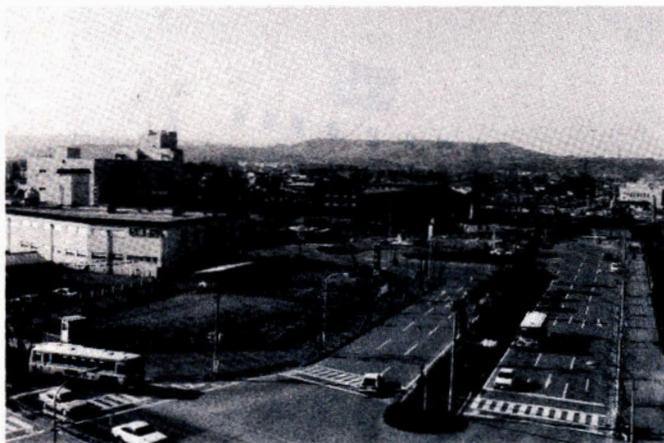
君津市の商業中心地を目ざす坂田

土地区画整理事業の進展に伴って、君津駅坂田口には、整然と区画された商業、住宅用地が生まれた。橋上駅として新装なった君津駅坂田口には、ロータリーが設けられ、それを中心として二万平方メートルは商業用地として指定された。

新日鉄の進出によって人口が急増し、日々大きく変貌を遂げつつある坂田には、大手スーパーや月販店、銀行、その他各種商工業者の進出希望が殺到した。地元商工会では、坂田開発の基本計画や地元業者との競合問題などを考慮しながら、それら進出予定企業について厳密な検討を加えていった。

かくして、駅前ロータリーに面した左手、約一八〇〇坪に「西友ストア」の進出が決定、続いて、同じく左手、商店街のほぼ中央の一五〇坪に、「イトーヨーカ堂」の進出が決まった。また、ロータリーの右手には、月販店「丸井」と地元銀行の「千葉相互銀行」が進出することになった。これら有力企業の進出決定によって、坂田には「ショッピングセンター」としての「核」が形成されたのである。

その後、昭和四十八年のオイルショックの突発などにより、「西友ストア」および「丸井」の進出計画は一時たな上げあるいは予定変更され、丸井の進出予定地に建てられたビルには「千葉銀行」が入居、営業を開始した。しかし「イトーヨーカ堂」は計画通り建設に着工、昭和五十一年四月、開店した。これにより、地上五階建、建物延面積三三六〇坪、売場面積一七七七坪という大型店が誕生、坂田はその面目を一新したのである。続いて、地元の転業者などによって「サンプラザ」「マルキビル」「剣持ビル」などが建



発展著しい君津駅坂田口

設され、貸店舗として営業を開始した。これら貸店舗には入居申し込みが相次ぎ、完成と同時に各種専門店が入居し営業を開始した。

かつて君津地区の商業の中心地は駅の南側、すなわち中野および久保であった。しかし、イトーヨーカ堂を中心に各種専門店が集中、ショッピングセンターを形成したことによって、いまやそれは完全に坂田側に移ってしまった。

その大きな力となったのが市営駐車場である。ショッピングセンターの形成にあたり、坂田土地区画整理組合では、隣接する七四二九・二七平方メートルの土地を駐車場用地として確保し、収容台数三〇〇台の市営駐車場とした。イトーヨーカ堂の開店に伴い、同駐車場は同店で一定額の買い物をした人には無料で解放されることとなり、坂田商店街は、地元はもちろん、旧小糸町、旧清和村、さらには富津市などから、広く消費者を吸引することになったのである。

昭和五十二年七月には、坂田に進出した事業者が集まって「坂田商店連合会」が結成された。連合会は、業種、業態を問わず、ショッピングセンターの充実と共通の利害を調整し、さらに、結束を固めることを目的に結成した。

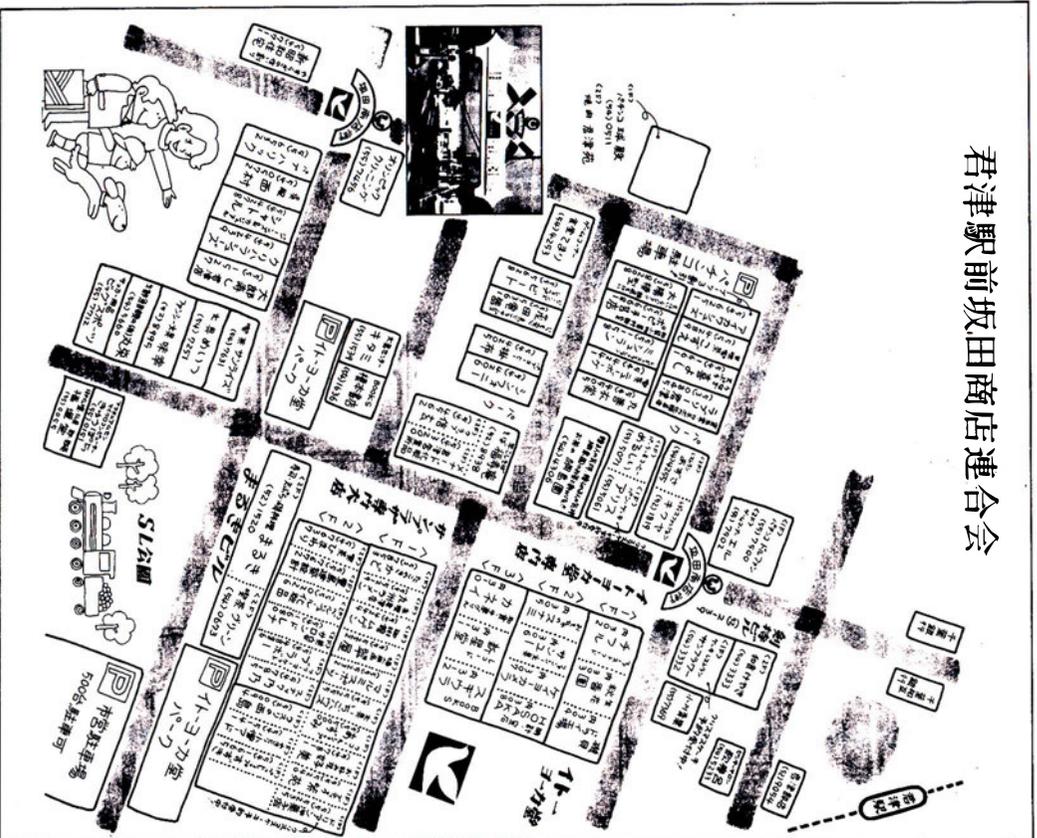
坂田商店連合会が最初に手がけた仕事は、歩行者天国運動、商業地域の環境づくり、アーチづくりなどであった。アーチは、昭和五十三年六月、駅からの入口と、坂田一九十九坊線の入口の二カ所に設置した。

「坂田商店連合会」には、地元の転業者と新規進出企業とが同じテーブルにつき、共通の問題を話し合い、坂田の商業地域開発の原動力としての役割を果たしている。大型店の進出は、どこの商店街でも地元の抵抗が強く、さまざまな問題を生んでいるが、ここ

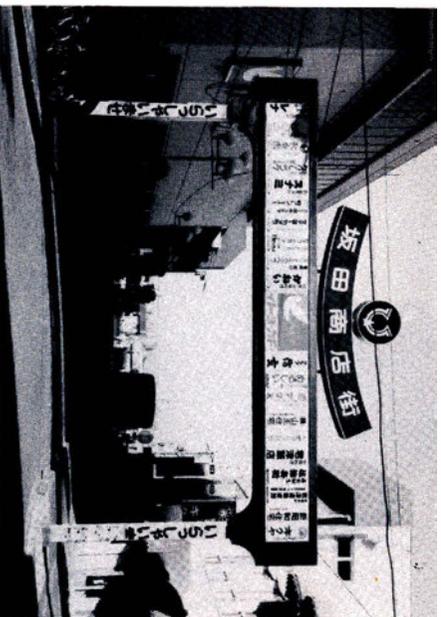


大型店「イトーヨーカ堂」

君津駅前坂田商店連合会



坂田においては、ほとんどこれらの問題は皆無で、地元業者と進出企業とが共存共栄を目ざして協力している。それも、商工業の発展に自分たちの将来をかける地元業者の熱意に負っているといえよう。



坂田商店街アーケード

■君津商工会員(坂田分)

昭和五十六年七月現在

商号・会社名	代表者	業種	住所	電話	備考
市川 ずし	市川 昇	すし	東坂田 一三二二	(52) 二四二二	
グリーンフーズ株	菊池 重雄	軽食・喫茶	〃 三一六一五	(54) 七三二一	
太陽模造型	渡辺 章	プラモデル	〃 二一七五	(55) 五二五五	
メナード化粧品君津代行店	川本 幸代	化粧品販売	〃 二一八一八	(54) 三二〇〇	
福寿庵	作本 泰朗	日本そば	〃 二一八一八	(52) 八九三八	
(有)丸二建	鈴木 利雄	建築業	〃 三一三二七	(55) 七八八九	
サンライズ	河内 忍	飲食業	〃 三一三一	(54) 七六三一	
フアミリー	小幡 倅	写真業	〃 三一四	(52) 五〇一四	
(株)福運堂	佐々 吉彦	仏具販売	〃 三一六一二	(55) 一八七二	
(有)ビッグスポーツ	大山 泰弘	スポーツ用品販売	〃 三一六一三	(55) 七七一二	
(有)山口石油	山口 清司	給油所	〃 四一五八	(52) 二四六〇	
ギフトショップまぎあぐらす	田中 さなえ	ギフトショップ	〃 二一九九	(55) 五二五二	
(株)堀江商店君津営業所	堀江 孝二	石油小売業	〃 四一三一	(52) 二八五六	
ドンキホーテ	安達 香行	ファッション小売	〃 二一六一六	(54) 七二五二	
小僧フード	半沢 祐司	飲食業	〃 二一六一六	(54) 五一四一	
九州ラーメン友里	立野 征夫	飲食業	〃 二一六一六	(55) 五二一九	
(有)三祐(君津店)	佐生 建一	バスセンター	〃 四一九二〇	(54) 五九一一	
君津バツテイングセンター	高品 市太郎	自動車用品	〃 四一〇一三〇	(54) 五三八一	
(株)タカエボアチユール	綱島 才司	茶のり販売	〃 二一七三	(54) 四三〇六	
(株)網島	茂田 房男	家電販売	〃 二一八一五	(55) 五三六一	
イトーヨーカ堂	伊藤 雅俊	大型食料店	〃 二一六一〇	(53) 一〇一一	
噂の女	中津留 道子	飲食業	〃 一一二二四	(55) 四二九九	総代

商号・会社名	代表者	業種	住所	電話	備考
(株) 剣 持	平野 賢二	不動産	東坂田二一五七	(52) 二一五四	
ワコールショップあずみ	上島 順子	衣料品	〃 二一六一六	(55) 五〇〇〇	総代
(有) ニシジマ薬局	西島 昭一	くすり	〃 二一六一六	(52) 〇〇九四	
シュートズくりはら	栗原 信明	履物	〃 三一三一九	(54) 四三八八	
スナックカトレア	秋元 一郎	スナック	〃 三一三一八	(55) 五五〇一	
て ま り	高橋 松江	飲食業	〃 二一八一二	(54) 四二五三	
(有) 富士商事	遠竹美代子	喫茶業	〃 三一七一一七	(52) 五七一一	
本吉店舗デザイン建築	三浦 威夫	清掃業	〃 三一七一一七	(52) 五七一一	
(有) 荏込喜八商店	本吉 伸一	建築デザイン	〃 三一五一九	(52) 一五一一	
田舎	荏込 喜八	製造業	〃 四一五一一二	(52) 二〇〇二	
栗原商店	谷 文夫	飲食業	〃 四一五一一四	(52) 五四六六	
(有) マルトデンキ	栗原 昭二	家電販売	〃 四一七一一四	(52) 八四七一	
(株) ケースカーヨ	鳥飼 義雄	家庭金物販売	〃 四一七一一四	(52) 三五五二	
(有) オースカー商会	岡本 正	家庭金物販売	〃 四一七一一四	(54) 一六一七	
(株) サカカイ	中村 京三	伸士服販売	〃 四一六一一六	(55) 八二二一	
明石醬油(株)	坂井 君子	ビジネスホテル	〃 四一六一一	(52) 二五四五	
保坂海苔店(株)	坂井 五郎	醬油醸造	〃 四一〇一三二	(52) 〇〇〇五	
本間鮮魚店(株)	保坂 勝	海苔仲買小売	〃 四一五一一六	(52) 〇〇七三	
本間鮮魚店(株)	本間 久雄	鮮魚	坂田三一六	(52) 六四二七	
トヨタカーローラ千葉(株)	勝又 豊次郎	自動車販売	〃 六七三一一	(52) 四七一	
君津営業所(株)	折出 好	住宅修理	〃 一五八四一二	(54) 六五四一	
便利屋	藤木 君枝	喫茶業	東坂田二一六一六	(54) 七六三七	
ひまわり	鈴木 善雄	喫茶業	〃 二一六一六	(54) 一六六五	
ペットショップすずき	平野 虎吉	ペット用品	西坂田一一二一八	(55) 七二一三	
美容室アップル	有野 操	美容卸小売業	〃 二一三一一三	(54) 四二四七	

